

むかしの川とのつきあい



伝統的な「マレク漁」の体験をする前に、カムイ(神)への祈り(カムイノミ)をおこなう。「マレク漁の集い」にて、上土幌町・東泉園。(p120)

環境
地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

2万年以上前の旧石器時代(p72)から開拓が始まるまで、十勝に暮らす人たちは自然とともに生きていました。擦文時代のころから農業も始まりましたが(p104)、あくまで部分的なものでした。

そのころは、自然をこわしてしまえば、自分たちの生活も成り立ちません。自然の生き物をカムイ(神)として、尊重してきました。(p134)

川は、毎年春にはイトウ、続いてウグイやマスがのぼり、そしてなんとといっても秋にはサケがたくさんぼってきます。その上、重要な「道」でもあり、生きる上でとても大切な場所でした。伝統的なアイヌ文化では、川も「カムイ」として見なされました。(p135)

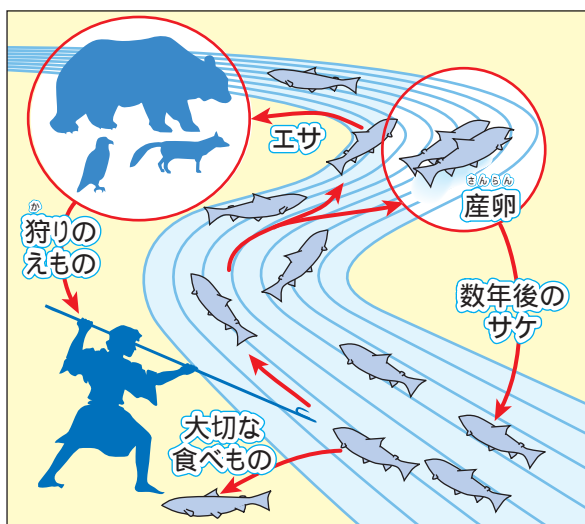
自然の「中」で生きる

伝統的なアイヌ文化では、サケの漁を始める時には、カムイノミ(カムイへの祈り)をおこない、サケを殺す道具も、祈りの道具のひとつとして考えられました。(p135)

そして、すべてのサケをとりつくさないで、上流のコタン(集落)の分や、サケを食べるクマ、キツネなどの動物の分も残されていたといえます。

どこかでとりつくしてしまえば、上流の人たちが、そしていつかは自分たちも、自然のめぐみを受けて暮らしていくことができなくなってしまいます。

自分たちも生き物の輪(生態系)の一部であるという、自然の「中」で生まれた「エコロジー」だったので。



上流の分があることで、これからもそのめぐみを受けられ、自分たちの暮らしが成り立つ。

自然や川とバランスのとれる人口

伝統的なアイヌ文化やそれ以前の文化の人たちも、暮らしのために木を切って利用してきました。縄文時代に八千代遺跡(帯広市: p90)に住んでいた人たちがいなくなったのは、環境が悪くなったからだ、ともいわれています。

しかし、十勝全体では、自然のめぐみで生きられる数の人だけが暮らしていました。それをこえると、暮らしていけなくなります。そのため、川や林が少し傷んでも、自然の回復力できれいに力強くなることができました。

きびしいことですが、人間の数も暮らし方も、自然とのバランスの中に収まっていたので、全体として、自然や川の持つはたらきがこわれることはありませんでした。



八千代遺跡(帯広市)。縄文時代にも木は切られて利用されたが、全体的には自然のバランスの中で人は生きていた。(p90)

3 エコロジー: もともとは生態学(せいたいがく)といって、生き物のことを他の生き物とのつながりや、周りとのつながりから考える学問のこと。今では、自然環境や人間が暮らす環境のこと、また、そのことを考えること、考えた結果の工夫や暮らし方、も

の考え方、そこから作られたもの自体なども指す。